

観て想う

——ラスキン、ペイターからワイルドへ——

澤井 勇

(実践女子大学教授)

オスカー・ワイルドの師匠すじから、ラスキン、ペイター、そしてワイルドという、これら異彩を放つ三人の美の使徒を一緒にして考えるとき、そこにはいろいろな思いが錯綜する。個人的な師弟関係、芸術観や人生観の共通性と差異、文体のこと、あるいは思想的な面では、反体制的無政府主義者とは逆の、個から全体に向かうアナーキズムの問題等、思いつくままにもさまざまなことが浮かんでくるけれども、さしあたって今の私にいちばん関心をもたれるのは、この三人は「観て想う」ということで通底していて、しかもそのことがこの三人をもっとも基本的なところで結びつける根源的な核となっているように思われる、ということである。

ここで「観て想う」というのは、実際に眼に見える現実の世界を虚心に、つまびらかに見て、そこから想像の世界をふくらませたり、現実の世界の深奥に分け入ったり、はては永遠に隠された真なるものを感得するところまでいたる、人間精神の複合的な働きであるが、それは古来いろんな形をとってあらわれている。哲学の領域では古代ギリシアにおける *θεωρία*、視覚印象から知が形成されるとするイギリス経験論、現代ではケン・ウィルバーによる総合的な知のパラダイムとしての「三つの眼」がある。東洋ではあまり聞かれないように思うが、「佛説観無量壽經」で正行の一つとして説かれている観察は、まさにそれであろう。これが文学の世界になると、「観て想う」ことがそのままの動機となり、そこから想像の世界が大きく展開して作品が生み出されることになる。もっとも古くには『ダフニスとクロエ』があるけれども、これがきわだって見られるのは19世紀イギリス文学である。ワーズワースの「空の虹を見れば、わが心おどる」や「ティンターン寺院」、「水仙」、キーツの「ギリシア古甕のオード」、ホプキンズの「時至らず」や「神のかげやき」などはその典型であろう。

しかしながら、ワーズワース、キーツ、ホプキンズたちは、いずれにしても鑑賞の域にとどまっていて、そこに何かしら究極的、絶対的なものを感じ取って、喜悅の境に参入するにすぎなかったけれども、ラスキン、ペイター、ワイルドの場合は、「観て想う」ということが芸術活動のもっとも重要な基盤となっていたと同時に、そうした芸術活動が「人

間が生きる」という問題と深くかかわっていたことが最大特色とされる。

まずラスキンは、芸術の真の任務は「観て想う」ことであるとし、さらにそれを二段階に分けている。彼の眼は大体において自然界に向けられているけれども、第一段階は美しい対象を見て、その美しさに感動する「喜びの本能的自覚」で、彼はこれを *Aesthesis* と呼ぶ。第二段階は、そこからさらにすすんで、美しい対象の中に永遠なるものの栄光の証を探し求めるとともに、その対象から受ける喜びや快感を敬虔な気持ちで、しかも感謝にみちた気持ちで受けとめようとするもので、これを *Theoria* と呼んで、芸術家の終極的な目標としている。ラスキンにとって、美なるものは真なるものを宿し、美なるものは敬虔さと高い特性をそなえた者の眼を通してのみ真なるものを啓示するのであって、そこには、「観て想う」とことと美と善との深いかかわりが窺える。

つぎにペイターは、真の批評は、対象をあるがままに見て、その印象をあるがままに受けとることから始まるとして、「観て想う」ことを真の批評の原点としている。また、彼が「理想的理性」と呼んでいるものも、じつは *θεωρία* であり、「観て想う」ことにほかならない。しかし、ペイターにおいて「観て想う」ということが独自のあらわれ方をしているのは『マリウス』であろう。『マリウス』は「近代人の心にとって可能な、宗教の一つの相」を、主人公の生涯を通して描き出そうとしたものであるが、その中に描かれている主人公の決定的といえる二つの宗教体験は、いずれも「観て想う」ことによっている。一つは絶対的超越的なものの存在を確信するものであるが、それは主人公が、或る日ローマ郊外の丘に遊んで、あたりの美しい景色を眺めていると、今しがた登ってきた下の方の道を見つめていたことであり、もう一つは、主人公が友に連れられて殉教者の未亡人セシリアの家を訪れ、その家の清らかなたたずまいや特異な美しさを漂わせる庭景色を目にして、解脱の境地に導かれたときのことであり、先に述べた「観無量壽經」に説かれる観察に通じるものを考えていたようであるが、ここでは、「観て想う」とことと美と真とが深くかかわっている。

それでは、ワイルドはどうか。まず、ワイルドが一番最初に発表した作品「ラヴェンナ」は、イタリアの古い町を訪れてあたりの情景を見ながら、そこに眠るダンテを偲び、そこに住んだことのあるパイロンに思いをはせるもので、それは、まぎれもなく「観て想う」ことから生まれた詩である、と言えよう。

しかし、ワイルドの芸術活動の基盤が「観て想う」というところにあったことを、もっとも端的に物語っているのは、彼がみずからの芸術観を明確に表明した『インテンションズ』である。周知のとおり、『インテンションズ』には四つの論文が収められているが、その中でも特に「芸術家としての批評家」は創作の原理を語ったもので、真にクリエイティブな芸術とは批評であるとして、批評が芸術であり、創作のなかの創作である理由は、批評が個人的な印象のもっとも純粋な形式であり、或る作品から暗示を受けると、その作品

とは違った新しい表現手段を用いて、より美しくより完璧な作品を生み出すからだ、と述べている。つまるところ、ワイルドにとって芸術とは、対象を見て印象を受け、そこから想像を（つまりワイルドの言う嘘を）膨らませるもので、それは「観て想う」ことを基盤としていると言えよう。また「仮面の真実」は、芸術的效果について論じているが、特にシェイクスピア劇において、役者はドラマの時代設定と作中人物の性格にそくした衣装をつけることによって、かえってその人物の人格を表し、劇的效果と劇的狀況を作り出すことになるという。これは、役者のつける衣装が観客の眼に訴えて、観客の想像の世界に働きかける効果を狙っているもので、観客の側からは「観て想う」ことによって、事実をつきつけられたり詳細に説明される以上に、事実が、しかも芸術的真実がえられるというわけである。

ワイルドにとって、芸術=美の世界は、つまるところ、みずからが生きる世界とならねばならず、さらには、その住民としてみずからが一個の芸術品とならねばならないのであるが、その基盤はあくまでも「観て想う」ことにあると言っていいように思われる。

ワイルドとモーム

佐藤 喬
(慶応大学教授)

ワイルド(1854-1900)とモーム(1874-1965)との間には20歳の年齢差がある。ワイルドはモームの名を耳にしたことがあったであろうか。モームがその処女作 *Liza of Lambeth* によって文壇に登場したのは23歳の時(1897)で、ワイルドはこの年に刑務所から出所し、パリへ行き3年後に亡くなった。ワイルドがモームの名を耳にした可能性は否定しきれないが、確証はない。

ワイルドとモームとの間には、共通点らしいものは見当たらず、むしろ対立点ばかりが目につく。しかし、共通点が全くないわけでもない。そのいくつかを列挙してみると

1. ジャンルの多様性
2. ハイブラウとロウブラウの双方に読者を有したこと
3. 共に天性の皮肉屋で警句の達人であったこと
4. 共に風習喜劇の伝統の継承者であったこと